

男性看護師に関する調査結果報告書

平成25年10月

謹啓

調査にご協力いただきました皆様

時下ますますご清祥のこととご拝察申し上げます。

この度は、私どもが取り組んでおります研究にご協力をいただきありがとうございました。

皆様のご高配により、貴重な結果としてまとめることができましたこと重ねてお礼申し上げます。

大変遅くなりましたが、結果の概要ができあがりしましたので、お時間ある時にでもお目通しいただきましたら幸いです。

今後も今回の結果を活かし、研究に取り組んで参りますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、本研究結果の一部を第 44 回日本看護学会（看護管理）において発表させていただきました。ありがとうございました。引き続き、分析を加え発表、論文投稿を検討しておりますので、ご理解賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様の益々のご活躍を祈念いたします。

謹白

平成 25 年 10 月

研究代表者

前田貴彦（三重県立看護大学）

共同研究者

立松生陽（岐阜県立衛生専門学校）、伊藤大輔（三重県立総合医療センター）

辻本雄大（奈良県立医科大学附属病院）

古川陽介（名古屋市立大学病院、愛知県立大学看護学研究科）

上杉佑也（国立病院機構三重病院）、荒木学（国立病院機構榊原病院）

杉野健士郎（三重県立看護大学）、北澤強志（駒ヶ根市役所）

水谷あや（三重県立看護大学）

連絡先

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1-1-1

三重県立看護大学 前田貴彦

TEL&FAX 059-233-5623

Mail : takahiko.maeda@mcn.ac.jp

I. 対象と方法

全国の150床以上の病院で、複数（2診療科以上）の診療科を有する1,150病院の内、本研究に協力の得られた544病院に勤務する男性看護師（准看護師含む）8,539名を対象に、平成24年12月～平成25年4月に無記名の選択式一部記述式の自記式質問紙調査を実施した。質問紙の回収は、回答者自身による返送とした。

分析は、回答者の背景に関する質問項目以外では無回答を除き、記述統計を行った。自由記述については、内容の類似性により整理した。

II. 回答者の背景に関して

回答者は、3,713名（回収率43.5%）であった。

平均年齢33.2±7.8歳（20～64歳）、平均臨床看護経験年数9.54±7.4年目（1～40年目）であった。

回答者が勤務する病院の所在地は、関東が919名（24.8%）と最も多く、次いで中部785名（21.1%）であった（図1）。

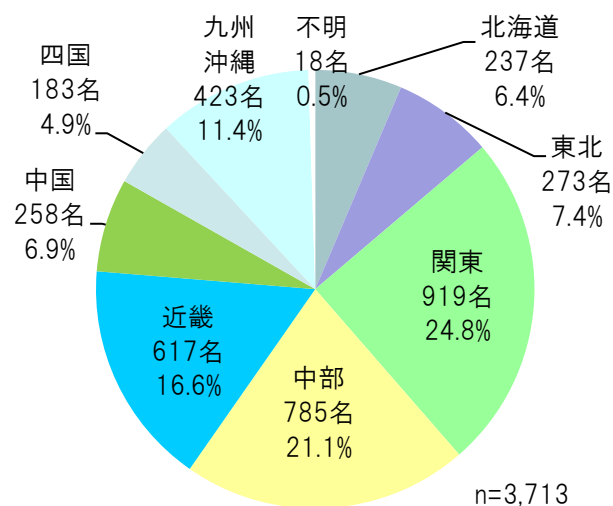


図1 回答者が勤務する病院の所在地

回答者が勤務する病院の病床数として「300床以上～500床未満」が1,427名（38.4%）と最も多く、次いで「150床以上～300床未満」905名（24.4%）、「500床以上～700床未満」799名（21.5%）、「700床以上～1,000床未満」376名（10.1%）であった。

回答者の所得免許は、複数回答で「看護師」3,616名（97.4%）、「准看護師」883名（23.8%）、「保健師」449名（12.1%）であった。また、看護師長や看護副師長、主任などの役職を有する者は、543名（14.6%）であった。既婚者は、2,222名（59.8%）であった。

看護師以外の社会人経験を有する者は、1,147名（30.9%）であった。

看護職関連の最終学歴は、「専修学校（専門学校）」2,404名（64.7%）、次いで「大学」545名（14.7%）、「看護師2年課程」437名（11.8%）であった。

回答者の配属先は、「内科系病棟」543名（14.7%）が最も多く、次いで「混合病棟」542名（14.7%）、「手術室」502名（13.6%）、「集中治療室」463名（12.5%）、「外科系病棟」461名（12.5%）であった（図2）。

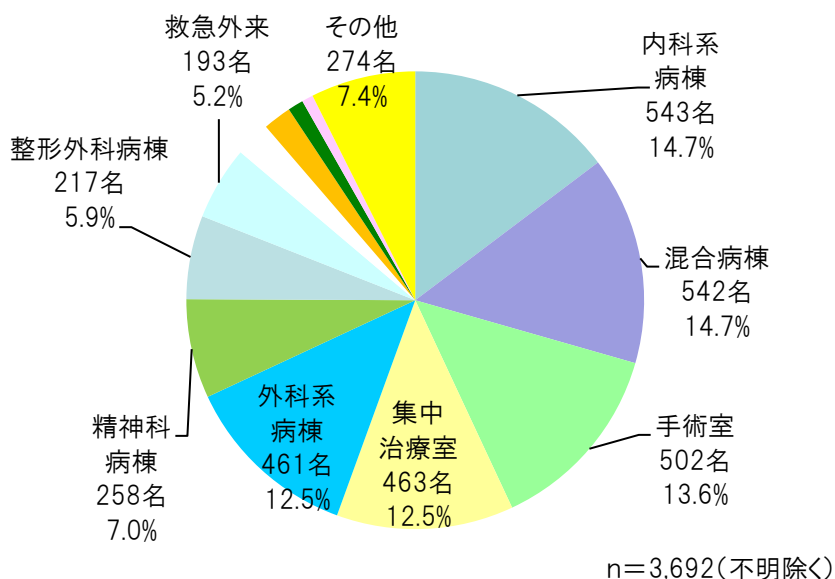


図2 回答者の配属先

Ⅲ. 就業環境に関して

1. 男性看護師の配置先として適していると思う病棟や部署について、「どこの病棟・部署でもよい」と回答した者は、2,242名（60.9%）であった。また、男性看護師が「適していると思う病棟・部署がある」と回答した者が考える病棟・部署では、複数回答で「精神科病棟」1,035名（71.9%）が最も多く、次いで「手術室」907名（63.0%）、「救急外来」886名（61.6%）、「集中治療室」718名（49.9%）、「整形外科病棟」688名（47.8%）であった（図3）。

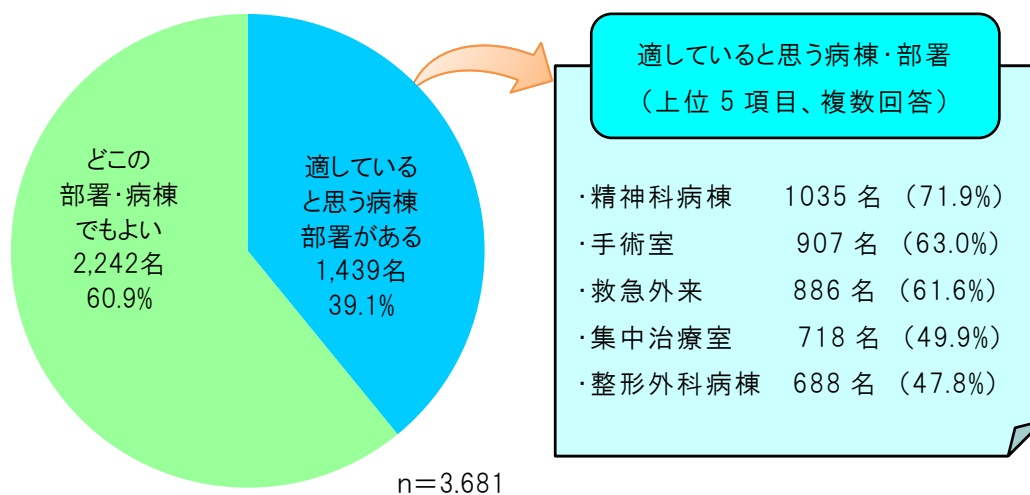


図3 男性看護師の配置先として適していると思う病棟や部署

2. 現在就業している病棟・部署での男性看護師の夜勤状況について、男性看護師のみで夜勤を実施することが「よくある」と回答した者は 73 名 (2.0%)、「ない」と回答した者が、2,012 名 (54.6%) であった (図 4)。

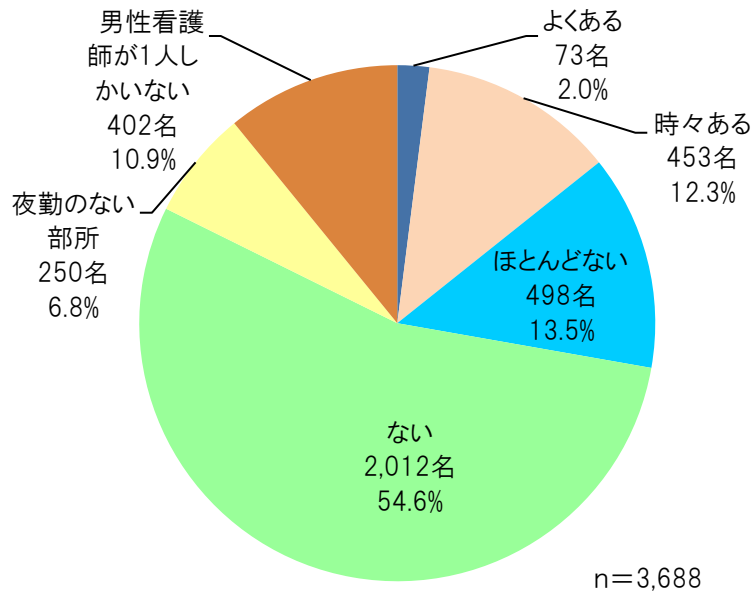


図 4 男性看護師同士の夜勤状況

3. 現在勤務する病棟・部署において適当と考える男性看護師と女性看護師の人数比率について、「男性看護師が女性看護師より少ない」と回答した者は、2,356 名 (64.2%)、「男性看護師と女性看護師がほぼ同数」951 名 (25.9%)、「男性看護師が女性看護師よりも多い」152 名 (4.1%) であった。その他の意見として、[業務に支障がなければ人数比率は関係ない]、[病棟や科によって異なる]、[自然に増えるならそのかたちで良い] などが挙げられた。

4. 男性看護師が仕事のことを相談する相手について複数回答で回答を求めたところ、「男性看護職者」1,236 名 (33.3%) が最も多く、次いで「家族」1,146 名 (30.9%)、「友人・知人」744 名 (20.0%)、「女性看護職者」599 名 (16.1%)、「看護管理者」352 名 (9.5%)、「看護職以外の医療職者」74 名 (2.0%)、「看護基礎教育を受けた学校の教員」18 名 (0.5%)、「中学や高校といった一般教育を受けた学校の教員」4 名 (0.1%) であった。一方、その他 154 名 (4.1%) でその内訳として、[相談相手がいない]、[相談しない] といった回答が目立った。

IV. キャリアに関して

1. 現在興味のある看護分野として、複数回答で回答を求めたところ、「救急看護」1,420名(38.8%)が最も多く、次いで「災害看護」912名(24.6%)、「急性期看護」754名(20.4%)、「看護教育」632名(17.1%)であった(図5)。

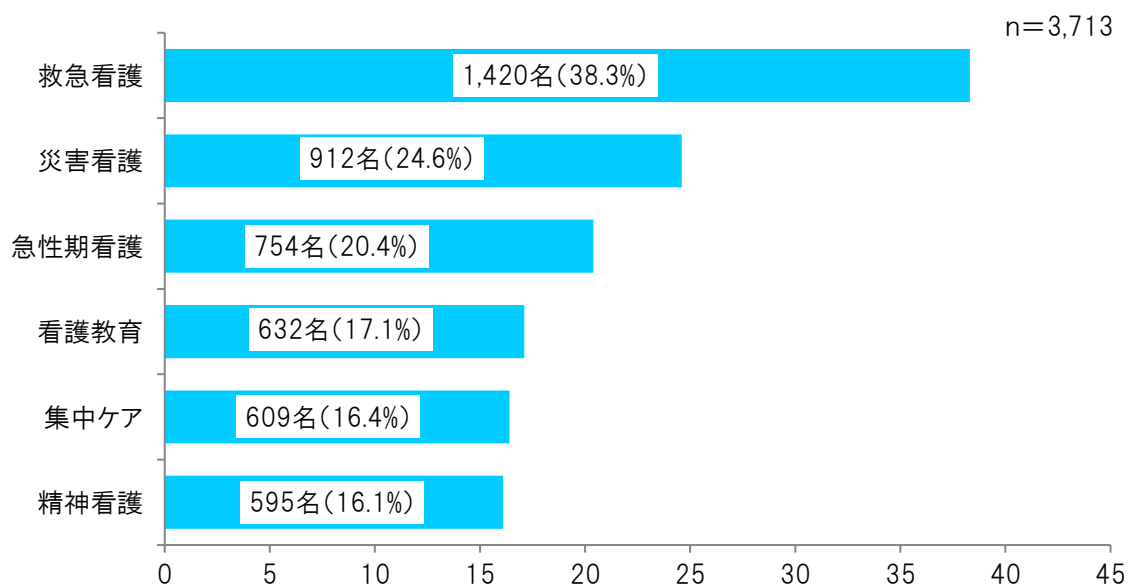


図5 興味のある分野

2. 日本看護協会や学会が認定している医療職種関連の「資格を取得している者」は、654名(17.7%)であった。取得している資格は、[呼吸療法士]、[認定看護師]などであった(図6)。

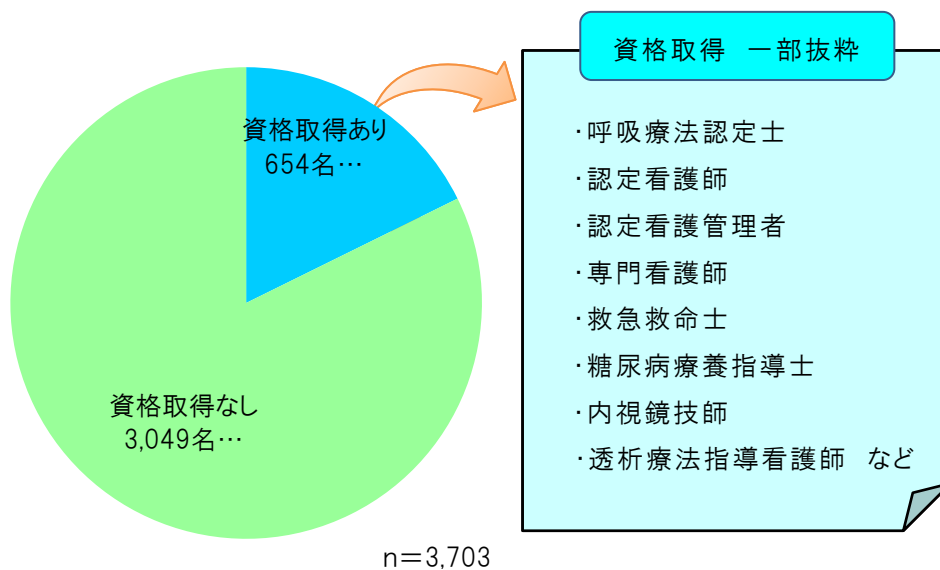


図6 医療職種関連の資格取得の有無

3. 看護師への志望動機について複数回答で回答を求めたところ、「経済的安定性」1,279名（34.5%）が最も多く、次いで「誰かの役に立ちたいとの思い」1,026名（27.7%）、「親や親戚に看護職者がいてその影響を受けた」914名（24.6%）であった（図7）。

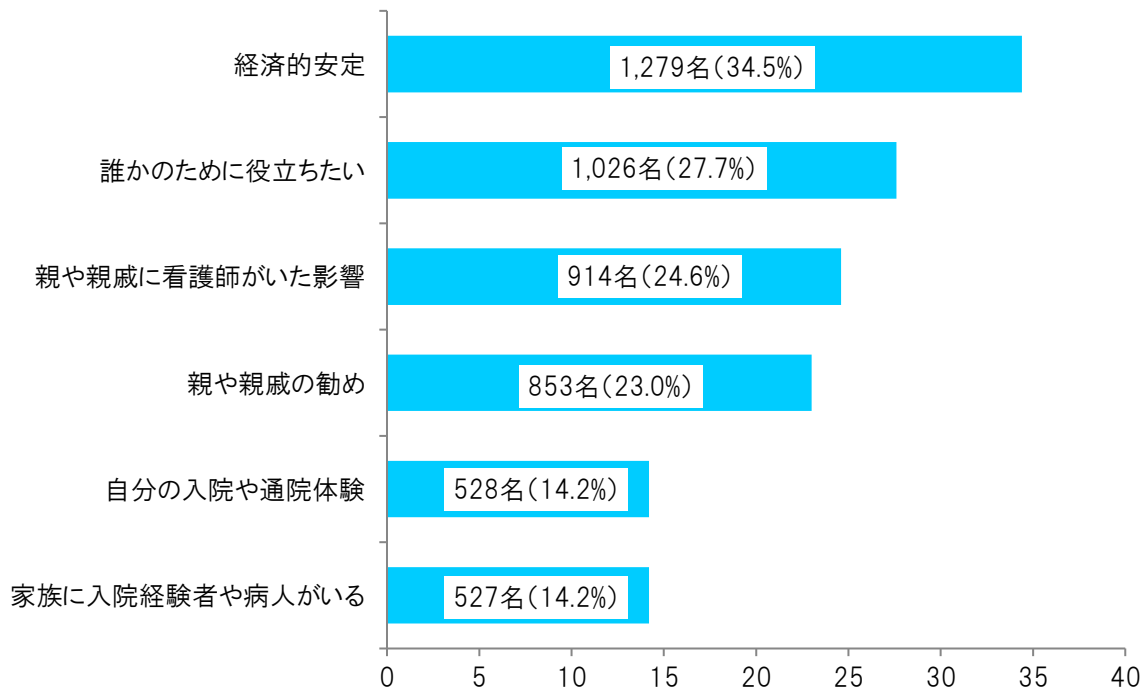


図7 看護師への志望動機

4. 看護師の資格が取得できる学校への受験を検討する際、「看護師が第一志望であった」と回答した者は、2,769名（75.8%）であった。なお、「看護師は第一志望ではなかった」と回答した883名（24.2%）の第一志望であった職業は、[医師]、[薬剤師]、[理学療法士]などであった（図8）。

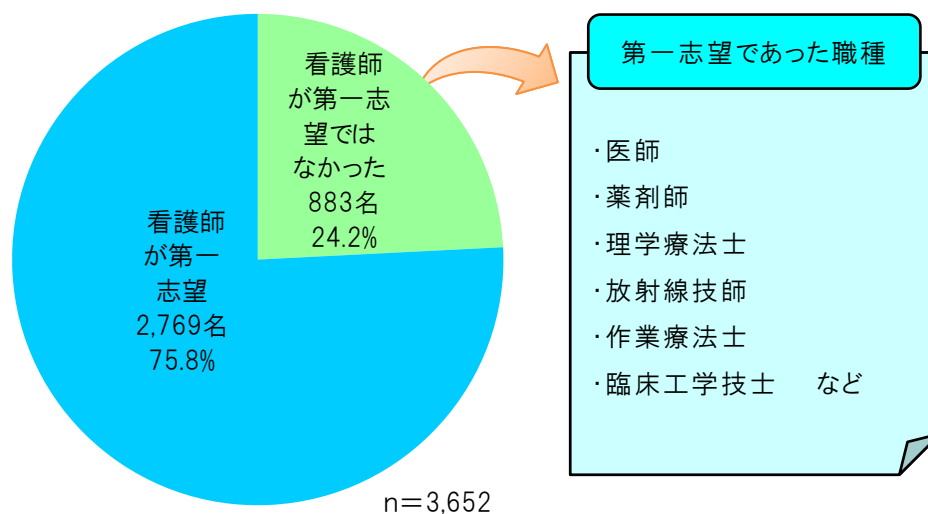


図8 看護師への志望順位

5. 今後、看護職関連を含む学校への進学について、「進学希望なし」と回答した者は、2,847名（78.3%）であった。なお、「進学希望あり」と回答した 788名（21.7%）が現在考えている最終的な進学先としては、[大学院修士（博士前期）課程] や [4年生大学編入学] が多かった。また、その他の内訳では、[認定看護師養成校] が多くあげられた。

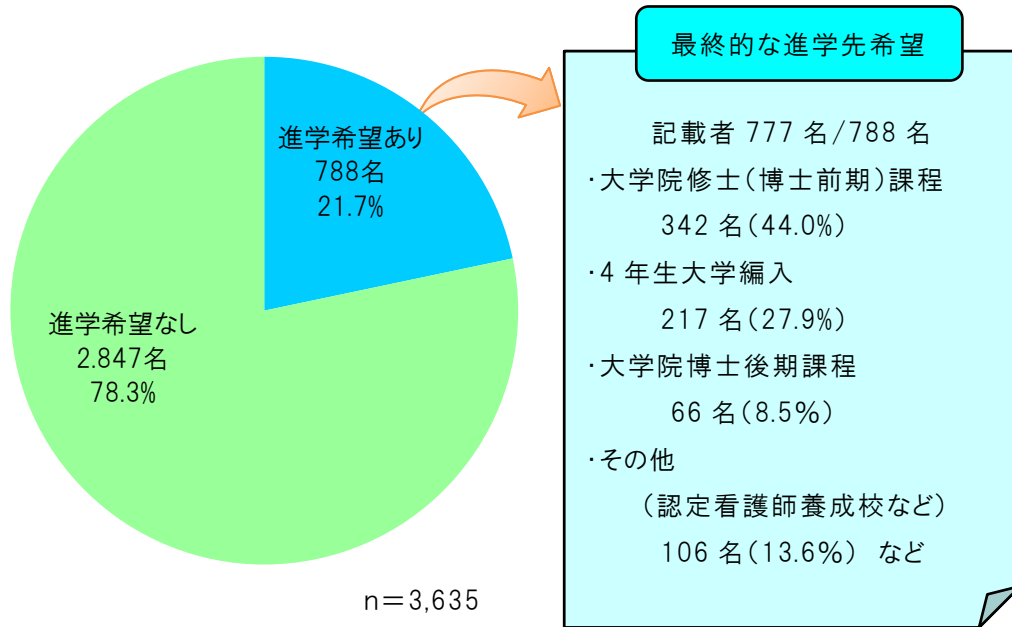


図 9 看護職関連を含む教育機関への進学希望

6. 将来的に目指そうと考えている看護職関連の職種について「特に目指していない」と回答した者は、1,966名（54.2%）であった。なお、「目指そうと考えている職種がある」と回答した 1,660名（45.8%）が考えている職種としては、[認定看護師]、[専門看護師]、[看護管理者] が多かった（図 10）。

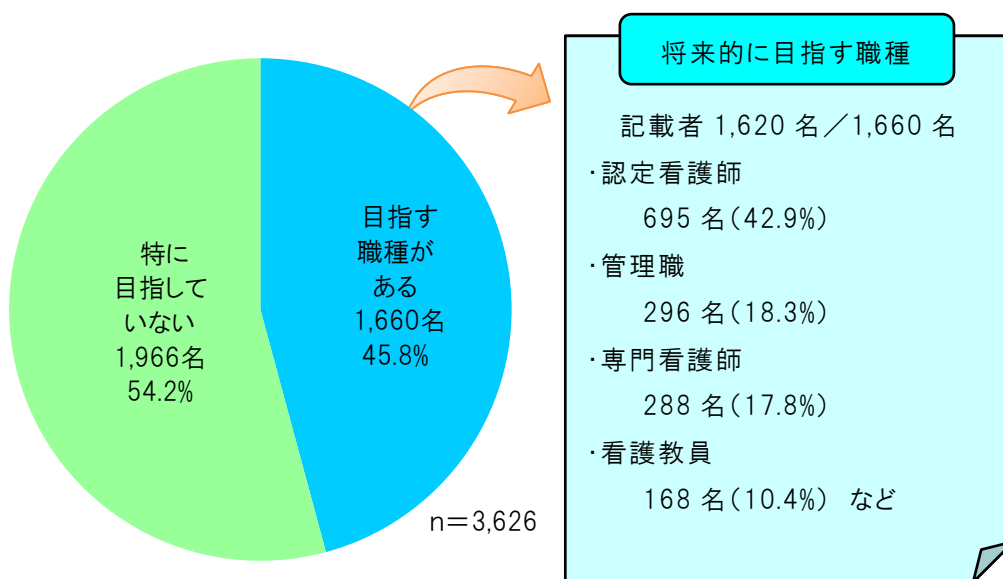


図 10 将来的に目指そうと考えている看護職関連の職種

7. 今までに看護師を辞めようと考えたことが「ある」と回答した者は、1,739人(47.5%)、「ない」1,920名(52.5%)であった。辞めようと考えた理由は、[給料や休暇などの待遇面]、[職場内での人間関係不和]などであった。

8. 看護職を継続していく上でモデルや目標とする男性看護師(看護関連職者)が必要だと「思う」と回答した者は、1,817名(49.2%)、「やや思う」963名(26.1%)であった(図11)。

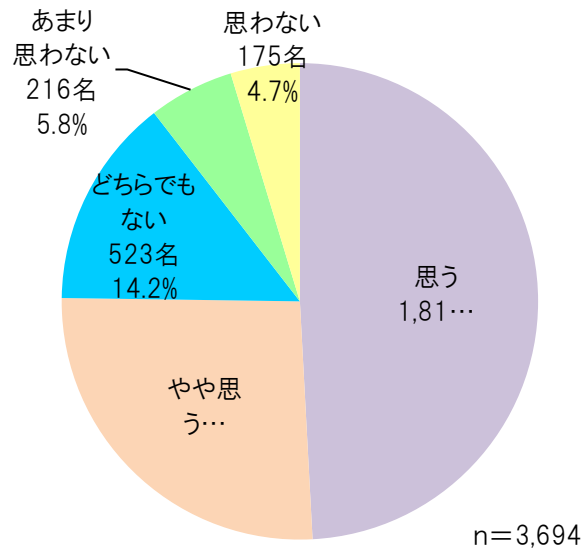


図 11 看護職を継続していく上でモデルや目標とする男性看護師の必要性

9. モデルとなる男性看護師(看護関連職者)が身近に「いる」と回答した者は、1,475名(40.0%)、「いない」2,215名(60.0%)であった。

10. 看護師という職業にやりがいを「感じている」と回答した者は、1,306名(35.6%)、「やや感じている」1,281名(34.9%)であった(図12)。

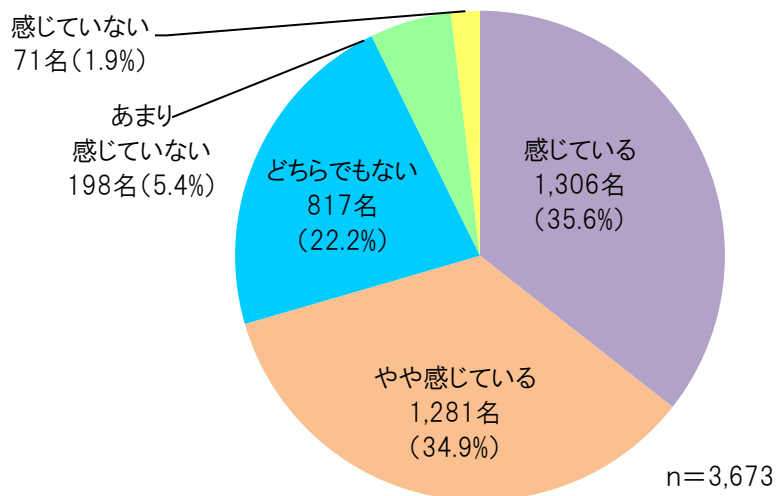


図 12 看護師という職業へのやりがい

V. 周囲からの認識に関して

1. 男性看護師の社会的知名度について、高まってきていると「思う」と回答した者は、603名（16.3%）、「やや思う」1,516名（41.1%）であった（図13）。

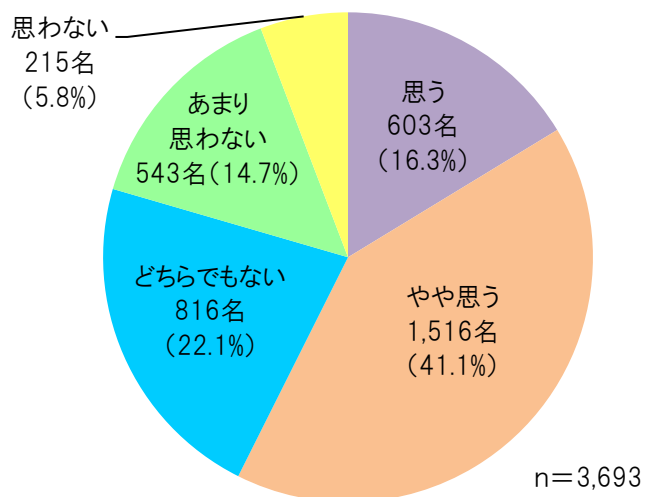


図13 男性看護師の社会的知名度

2. 今までに病院内で他職種の男性職員と間違えられたことが「ある」と回答した者は、3,167名（85.7%）、「ない」529名（14.3%）であった。

3. 病院や病棟内で男性看護師は良くも悪くも目立つ存在であると「思う」と回答した者は、1,660名（44.9%）、「やや思う」1,302名（35.2%）であった（図14）。

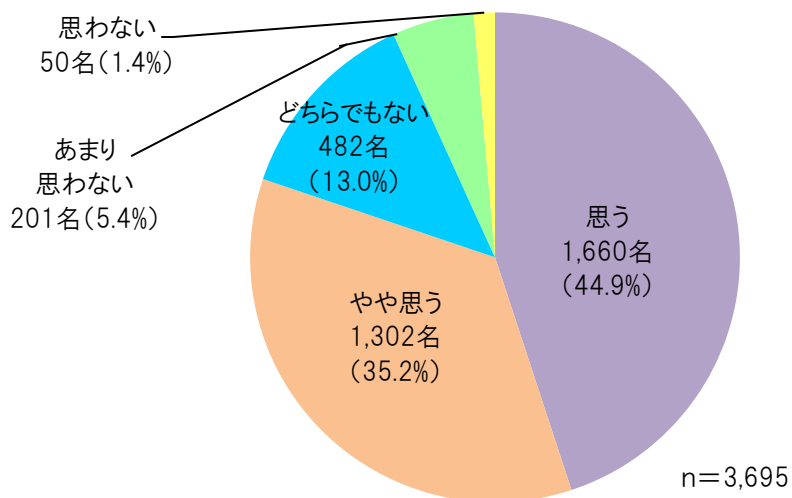


図14 病棟や院内での男性看護師への注目度

VI. 男性看護師間の連携に関して

1. 同じ病棟（部署）や病院に男性看護師がいることで心強さや安心感が「ある」と回答した者は、2,353名（63.8%）、「ややある」612名（16.6%）であった（図15）。

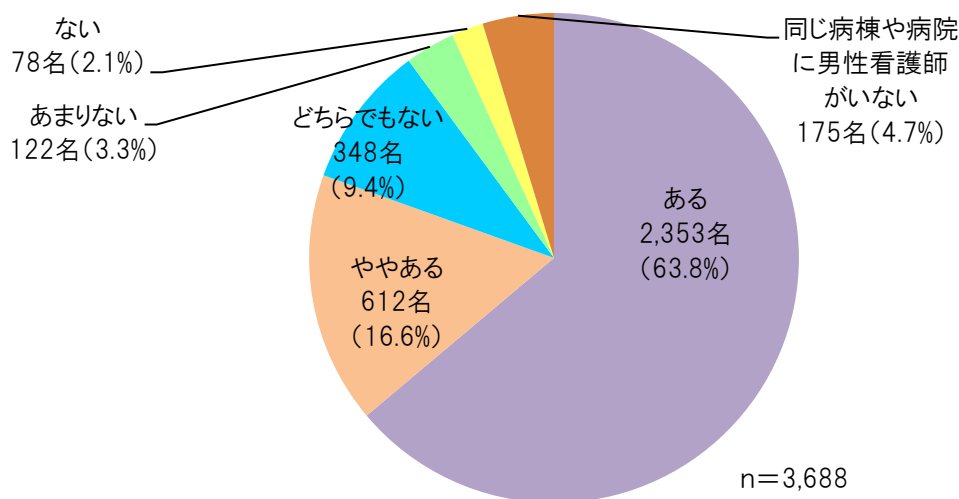


図15 同じ病棟(部署)や病院に男性看護師がいることで心強さや安心感

2. 現在勤務している病院以外の男性看護師との交流が「ある」と回答した者は、2,543名（68.9%）、「ない」1,144名（31.0%）であった。

3. 現在勤務する病院内で男性看護師の集まりや男性看護師会のような組織が「ある」と回答した者は、1,633名（44.3%）、「ない」2,057名（55.7%）であった。

4. 男性看護師の連携づくりなどができるような全国規模での団体の設立は必要だと「思う」と回答した者は、642名（17.4%）、「やや思う」863名（23.4%）であった。

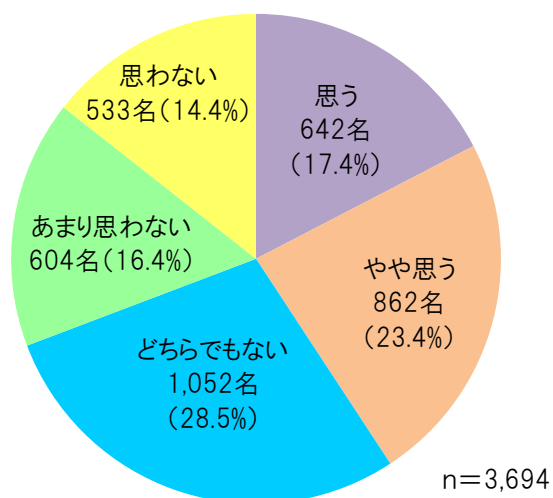


図16 男性看護師の連携を図るための全国規模での団体設立の必要性

5. 今後男性看護師が増加することを「期待する」と回答した者は、1,488名（40.3%）、「やや期待する」1,026名（27.8%）であった。期待する理由として、[病棟の雰囲気が変わると思う]、[患者も男性と女性がおり男性看護師だからできることもある]、[出産等による離職がなく安定したスタッフの確保ができる]などが挙げられた（図17）。

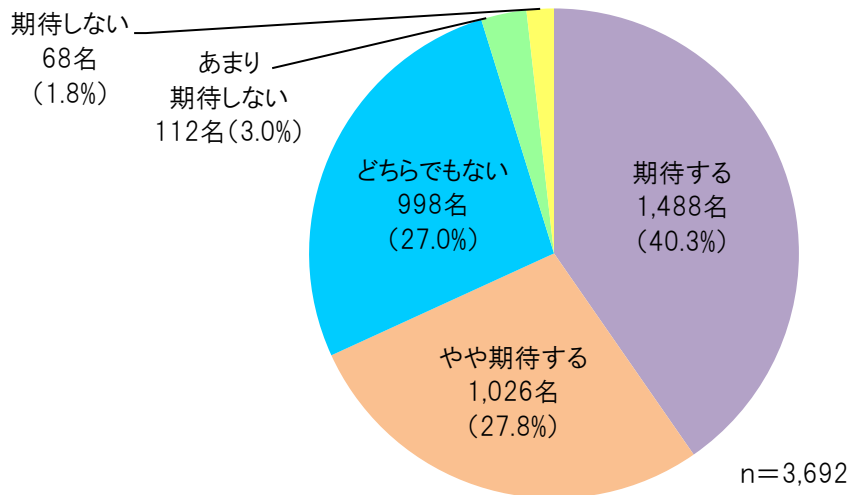


図17 男性看護師が増加することへの期待

VII. 看護に関して

1. 看護業務の中でも清拭や食事介助といった療養上の世話よりも、医療的処置を伴う診療の補助を実施したいと「思う」と回答した者は、732名（19.6%）、「やや思う」754名（20.5%）であった。

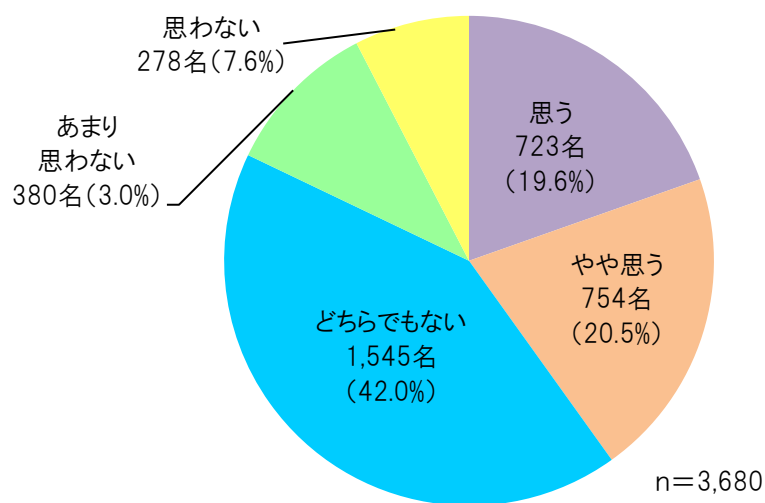


図18 医療的処置を伴う診療の補助を実施することへの認識

2. 看護師の性差が看護に影響を与えると「思う」と回答した者は、1,383名(37.5%)、「やや思う」1,620名(43.9%)であった(図19)。

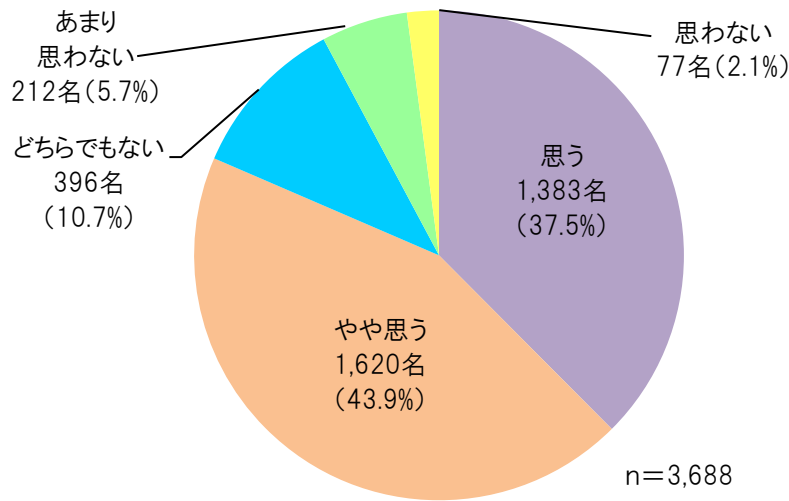


図19 看護への看護師の性差の影響

3. 患者や家族への看護において男性看護師特有の役割があると「思う」と回答した者は、871名(23.7%)、「やや思う」927名(25.2%)であった。「思う・やや思う」と回答し者が考える男性看護師特有の役割として、[患者の不穏時や興奮時の抑制]、[小児領域での父親的存在]などが挙げられた。

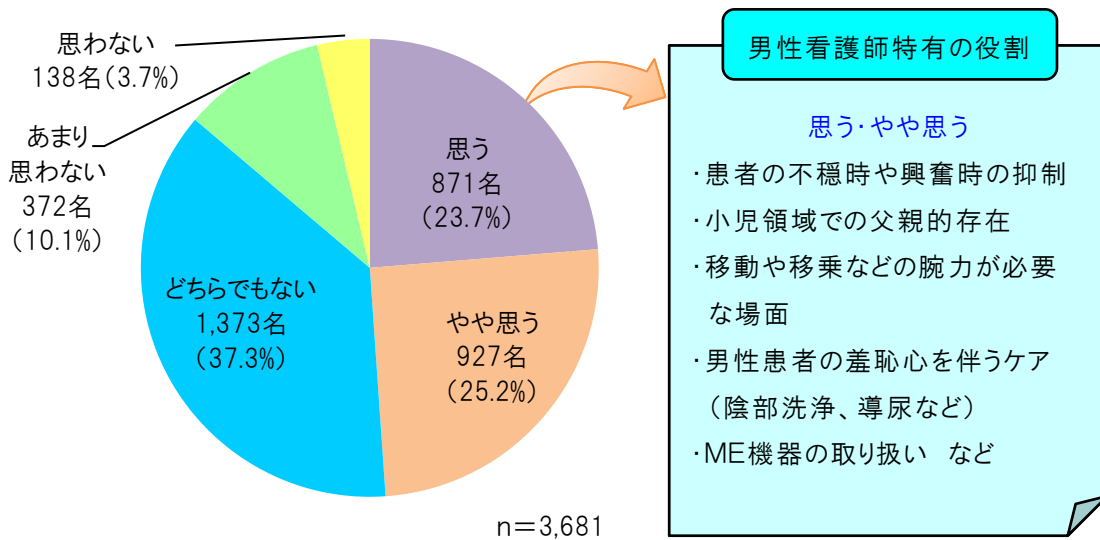


図20 患者や家族への看護における男性看護師特有の役割

4. 女性患者の羞恥心を伴う看護以外で、男性看護師であるため患者や家族への看護に苦慮した経験が「ある」と回答した者は、1,244名（33.8%）、「ない」2,439名（66.2%）であった。「ある」回答した者が苦慮したこととして、[若い女性患者の身体に関する問診]や[女性看護師を好む患者への対応]などが挙げられた（図 21）。

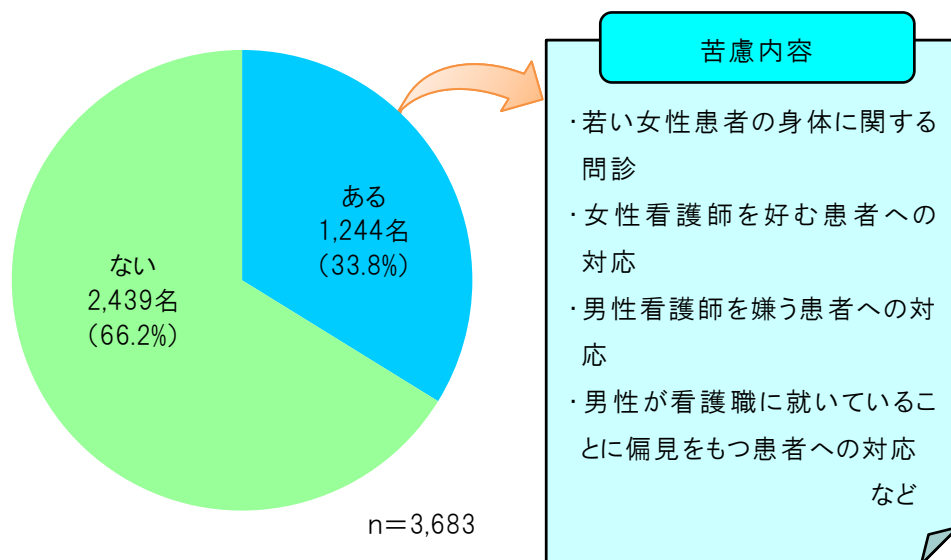


図 21 男性看護師であるための苦慮経験

5. 女性患者の羞恥心を伴う看護（処置含む）を実施する際にためらいを「感じる」と回答した者は、1,174名（31.8%）、「やや感じる」1,402名（38.0%）、「どちらでもない」450名（12.2%）であった（図 22）。

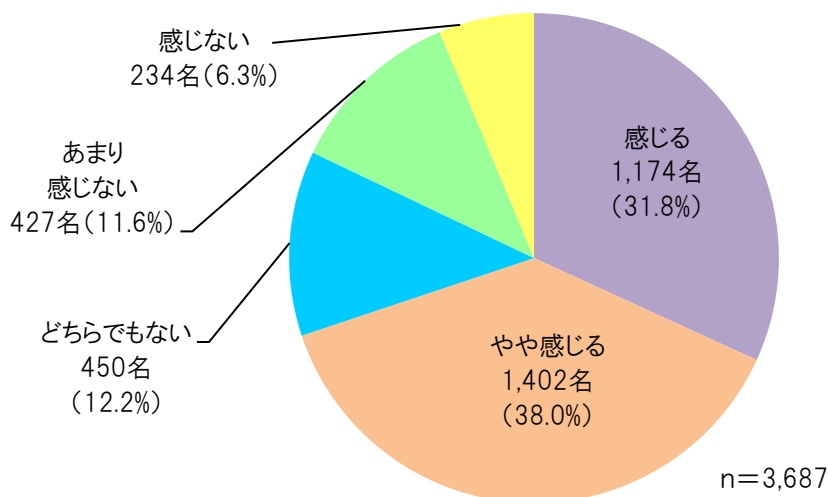


図 22 女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際のためらい

6. 女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際に患者や家族に自分が看護を実施してよいか事前確認を「いつもしている」と回答した者は、1,472名（39.8%）、「時々している」

1,503名（40.6%）であった（図23）。

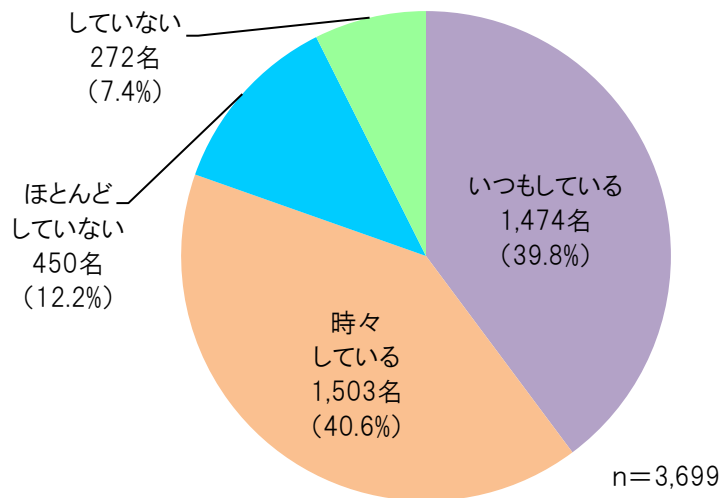


図23 女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際の事前確認

7. 女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際に拒否された経験が「よくある」と回答した者は、595名（16.1%）、「時々ある」2,314名（62.6%）であった（図24）。

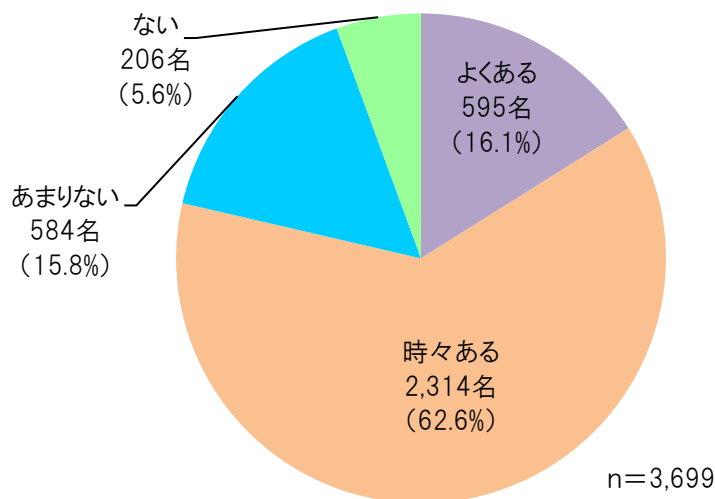


図24 女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際の拒否経験

8. 女性患者の羞恥心を伴う看護の実施を拒否された際に、無力感を「感じる」と回答した者は、246名（7.6%）、「やや感じる」507名（15.7%）であった（図25）。

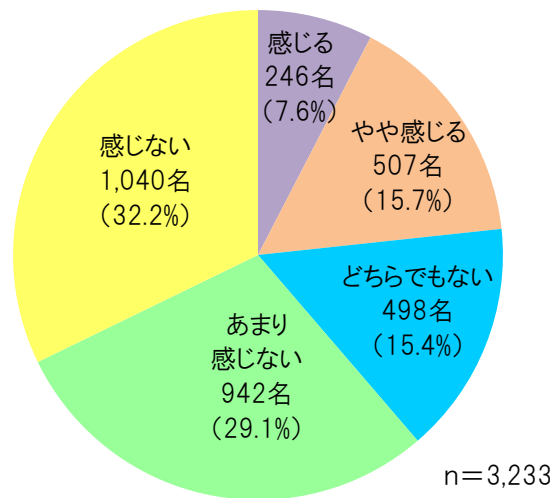


図 25 女性患者の羞恥心を伴う看護の実施を拒否された際の無力感

VIII. 女性看護師との関係に関して

1. 女性看護師と仕事上の関係づくりで苦慮した経験が「ある」と回答した者は、1,289名（42.8%）、「ない」1,725名（57.2%）であった。「ある」と回答した者が苦慮したこととして、[女性の話題についていけない] や [指導がセクシャルハラスメントとられないか気を遣う] などが挙げられた。

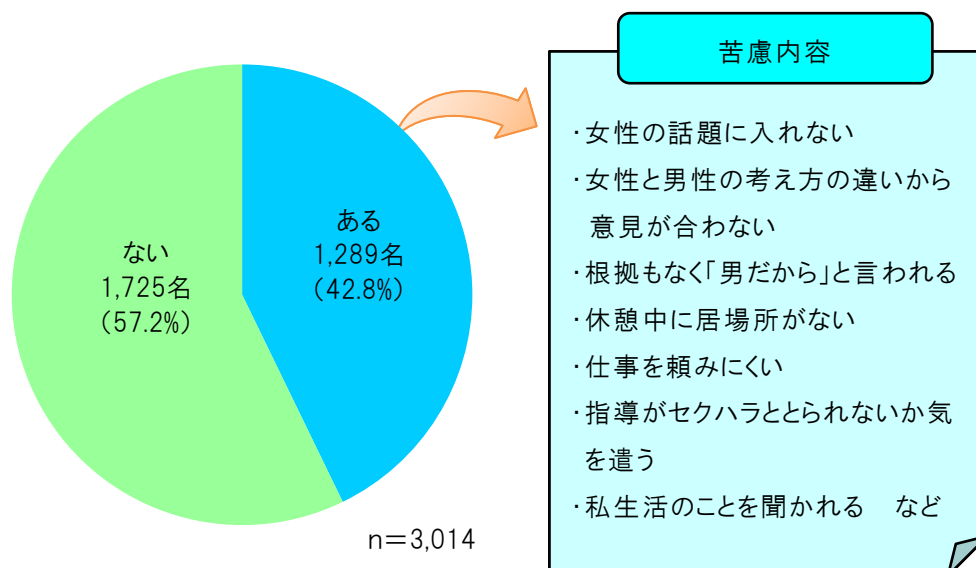


図 26 女性看護師との仕事上の関係づくりでの苦慮経験